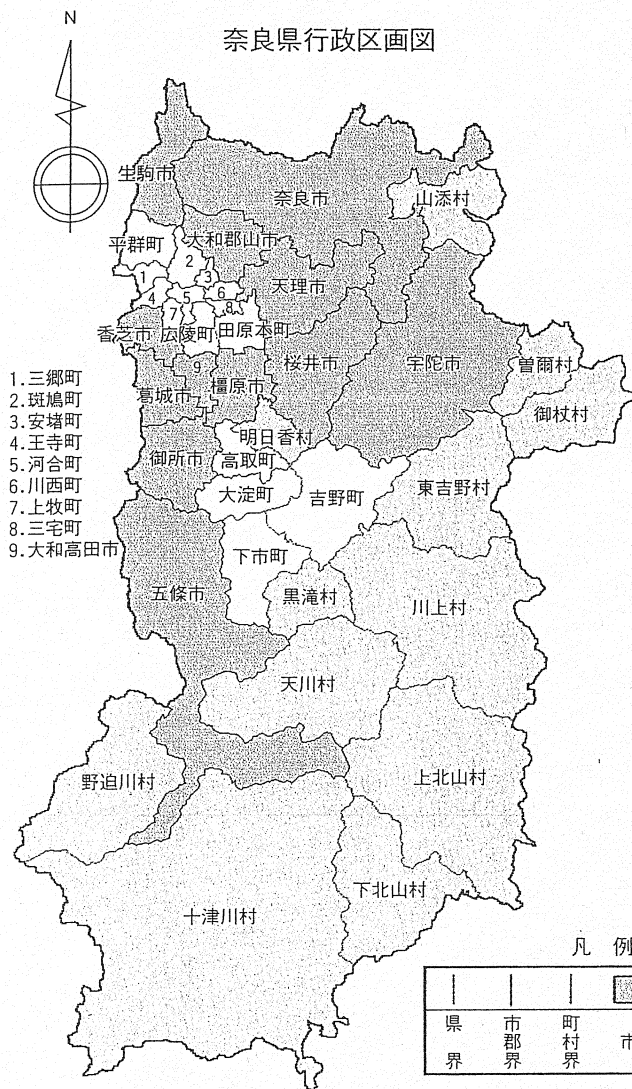


行政区画

市町村数 12市15町12村

奈良県行政区画図



位置

近畿の屋根といわれる山岳地帯を南部に持つわが奈良県は、わが国のほぼ中央部、紀伊半島の真ん中に位置し、周囲を山岳に囲まれた内陸県です。

方位	経緯	地名
東端	東経136度13分48秒	宇陀郡御杖村大字神末
西端	東経135度32分23秒	吉野郡野迫川村大字弓手原
南端	北緯 33度51分32秒	吉野郡十津川村大字竹筒
北端	北緯 34度46分53秒	生駒市高山町

両極間の距離 東西 78.6km 南北 103.4km
 県庁所在地 奈良市登大路町30番地
 (東経135度49分58秒 北緯34度41分7秒)

面積

奈良県の面積は、全国面積(377,943.57km²)の約1%の3,691.09km²です。市町村で一番広いのは、672.35km²の吉野郡十津川村で県面積の18.2%を占めています。最小は、磯城郡三宅町で4.07km²です。(数値は平成20年10月1日現在)

	面積	割合
奈良県	3,691.09km ²	100.0%
市部	1,272.21km ²	34.5%
郡部	2,418.88km ²	65.5%

地形

本県の地形は、吉野川に沿ってほぼ東西に走る中央構造線により、南部山地(吉野山地)と中央低地(北部低地)に分かれています。北部低地帯は、瀬戸内陥落地帯の東部にあたり、断層により陥落した地溝盆地である奈良盆地を中心に、これを取りまいて生駒・葛城・笠置の各山脈、竜門山塊、奈良丘陵の山地からなっています。奈良盆地は南北30km、東西16km、面積約300km²で、海拔40~60mの非常に平坦な沖積層からなっています。河川は盆地の東南隅より流出する初瀬川を主流として、四周の河川を合して大和川となり、生駒金剛山脈を横断して大阪平野へ流出しています。奈良盆地東側に隣接している大和高原地区は海拔400~500mの高原です。また、宇陀山地は竜門山塊の東に位置し、海拔300~400mの宇陀盆地と高見山麓、室生火山群地帯とからなっています。南部山岳地帯は本県の南部一帯を占める山岳地帯で、東は台高山脈を隔て三重県に、南西は和歌山県に、北辺は竜門山塊によって大和平野、大和高原地区に接しています。中央部は大峰山系によって西の十津川流域と東の北山川流域とに分けられ、大台ヶ原、伯母ヶ峰、山上ヶ岳、大天井岳、武士ヶ峰、天辻峠を連ねる横断山脈によって、北側の吉野川流域と分水嶺をなしています。大台ヶ原や大峰山脈は山岳美、溪谷美に富み、吉野・熊野国立公園に指定されています。



紀伊半島

提供：(財)リモートセンシング技術センター

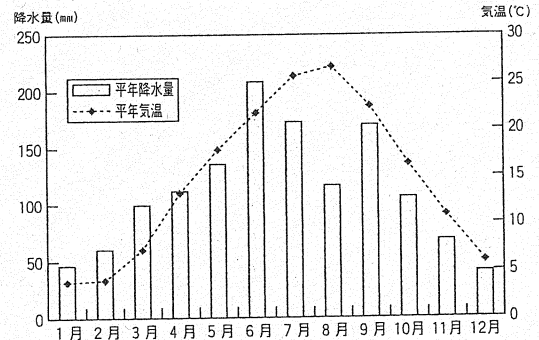
地 質

西南日本における地体構造線である中央構造線は、本県のほぼ中央部を東西に貫通しています。このため、本県は地質構造上南北の二部分に分かれ、それぞれ西南日本の外帯（南部山地）、内帯（北部低地）に属しています。これらの両地帯を構成する諸岩層はさらに古期、新期の二種類に分けることができます。従って、本県の地質は基本的には北大和（内帯）、中央帯、南大和（外帯）に三大別され各部分には古期岩層と、新期岩層とがあるので、結局六つの単元に分けられます。（参考文献：堀井甚一郎著「奈良県地誌」）

気 象

本県の気候は概ね温暖ですが、地形と同様南北で大きく相違します。気候区分によると吉野川を境として、南部は山岳で占められ山岳性気候、北部は盆地で内陸性気候です。東部山地は内陸性気候と山岳性気候の特徴を兼ねています。即ち、南部の山地は夏に雨が極めて多く、時には局地豪雨が起り、冬はきびしい冬山の様相を呈し、積雪もかなり深くなります。一方、奈良盆地は概ね雨は少なく、夏はむし暑く、冬は底冷えが厳しくなります。全般的には、台風のような大きな現象による影響よりも、むしろ地形の複雑さによる大雨、河川の氾濫、山がけ崩れ等の災害と局地的な強風が目立っています。また盆地、高原地方では夏の干ばつ、冬の夜間冷却による異常低温、霜及び霧の発生等の気象災害もしばしば起ります。

奈良市の月別平均気温と月間降水量(平年値)



(注) 平年値とは1971年から2000年の平均
資料：奈良地方気象台

人 口

本県では、旧石器時代からすでに人々が活動していたことが知られています。

先史時代の遺跡数から人口を推計した研究によれば、縄文時代の近畿の人口はほぼ300～4,400人の間で推移していました。これが弥生時代には108,300人程に急増したとされています。本県の人口の推移もこれと軌を一にしていたとみられ、稲作の普及と共に人口が急増し、後の大和朝廷成立を促す社会的・経済的な基盤を確立していったのであろうと考えられています。

大和に朝廷が成立し、政治・文化の中心地となると、その都の人口は巨大なものとなりました。藤原京の人口は1～3万人といわれ、これに続く平城京は少なくみると7万人前後、多く見積もって20万人の人口を持ったといわれています。仮に20万人説をとるならば、平城京内の人口密度は、14,000人/km²程になり、唐の長安よりやや少なく、平成20年の大阪市(11,930人/km²)より多くなります。7万人程であったとしても奈良の都は当時世界有数の大都市であったことには変わりありません。

また、奈良時代の平城京を除く大和の人口については13万人説と6万5千人説とがあります。

中世の人口は史料がないため知ることができませんが、江戸時代になると八代将軍徳川吉宗の時代の享保6年(1721)から始められた全国人口調査があります。第2回は同11年に実施され、以後6年毎に行われました。この調査は、武士の人口や年少者の人口が除かれていることなどいくつかの問題があり、実際の人口より幾分過小であると思われる。しかし、現存している史料によって計10回分の大和国の人口を知ることができます。

享保6年(1721)の413,331人を100とすると、天明6年(1786)には81.4(336,254人)にまで減少しましたが、文化・文政の頃から増加に転じ弘化3年(1846)には87.4(361,157人)にまで回復しています。

明治の初めには、人口の調査もほぼ実勢に近くなり、明治5年(1872)の記録では423,004人となっています。奈良県再設置当時の明治20年(1887)には、491,185人であり、幕末以来の人口増加がさらに進んだことを示しています。

大正9年(1925)の第1回国勢調査の人口は564,607人であり、明治5年から約半世紀の間に33.5%の増加を示しました。

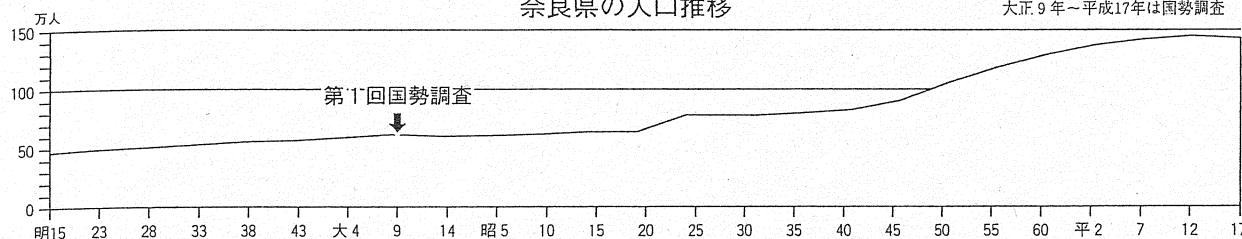
その後、人口は60万人程度で安定していましたが、昭和20年代には戦時中の疎開者、戦後の引き揚げ者の流入にベビーブームが重なったため、一挙に80万人近くに増加しました。昭和35年以降には盆地部での過密化と山間部の過疎化が同時に進行しましたが、県全体としては著しい人口の増加をみるようになります。国勢調査で対前回調査からの増加率をみると昭和45年で12.6%、昭和55年で12.2%の高い伸びを示しました。

しかし、昭和60年には7.9%、平成2年には5.4%、平成7年には4.0%と鈍化傾向が進み、平成12年には0.8%となり、昭和40年以来はじめて1%を下回りました。平成17年国勢調査では人口は1,421,310人で増加率は△1.5%となり、昭和30年以来初めてマイナスとなりました。このように、本県では、昭和38年以來、北西部地域が大阪という大都市の通勤圏として宅地開発が進んだこともあり、大阪を主とする他府県からの人口の流入が進み、40年代、50年代には高い転入超過を示していましたが、近年は、少子化の進行や県外からの転入者の減少などの影響により、伸び率は減少に転じています。

住民基本台帳人口移動報告によると、平成2年以降は転入超過数も減少傾向にあり、平成10年には36年ぶりに転出超過に転じ、平成19年も10年連続で転出超過になりました。

奈良県の人口推移

※明治15年～大正4年は現住人口、
大正9年～平成17年は国勢調査



産 業

【農 業】

奈良県では、恵まれた気象条件や高い生産能力を活かして、古くから農業が発達してきました。奈良盆地には雨が少ないことから多くのため池が造られ、近世には、米の他に綿や菜種、たばこ等の商品作物が盛んに栽培され、「田畑輪換」と呼ばれる水田畑作の営農形態が確立されていました。現在は、京阪神大消費地への至近性を活かし、多品目少量生産ながら高度な栽培技術を駆使した生産性の高い多彩な農業を展開しています。

大和平野地域では、米をベースに、野菜（いちご、トマト、なす、ほうれんそう等）や「花き」（きく、ばらなどの切り花やシクラメンをはじめとする鉢花等）の収益性の高い施設栽培が盛んに行われています。大和高原地域では、国営で開発された農地を中心に夏期冷涼な気象条件を活かしたお茶や高原野菜の生産が盛んであり、畜産や花き・植木栽培も行われています。五條吉野地域の北部は、国営で開発された農地を中心にかきやうめなどの果樹栽培が盛んであり、かきは全国屈指の産地となっています。また、南部ではわさび、山菜、きのこなど地域の特性を活かした特産品の生産が行われています。

県では、意欲ある農業の担い手への支援、マーケティング戦略に基づいた農産物の振興、農地の保全・有効活用の推進などに取り組み、新たな時代にふさわしい農林水産施策を展開していきます。

主要農産物の生産量・産出額（平成19年）

	生産量（t）	産出額（億円）	全国順位（生産量）
か き	28,100	56	2
う め	2,190	4	5
荒茶（加工）	2,530	11	6
い ち ご	3,410	27	14
な す	7,400	14	17
ほうれんそう	4,680	17	21
切り花きく	4,490万本	13	7
米	49,600	110	41

資料：近畿農政局奈良農政事務所

【林 業】

本県の林業は、県総面積の77%を占める恵まれた森林と豊富な木材の蓄積を背景に、山村地域の基幹産業の一つとして重要な地位を占めています。

吉野地方では足利末期（1500年頃）に造林が行われた記録があり、森林の半数以上がスギ・ヒノキで占められています。明治時代には、多くの村外の地主が林業経営にのりだし、早くから民有林林業が発展してきました。地質と気象条件に恵まれているうえ、密植多間伐という独特な育林方法がとられていることから、県産の木材は、年輪幅が狭く均一で、見た目にも美しく、強度に優れ、建築用材として高い評価を受けています。しかし、昨今の森林・林業を取り巻く情勢は、国産材の自給率は若干上昇しているものの、木材需要の低下や木材価格の低迷などから、間伐をはじめとする適切な施業が十分に行われず、森林所有者の高齢化、世代交代による経営意欲の減退及び林業労働者の減少などにより、厳しい状況にあります。

このような状況に対処するため、本県では、目指すべき森林を、「林業生産」と「環境保全」に大きく区分し、森林の整備や林業・木材産業の振興並びに山村地域の活性化に取り組んでいます。そういった中で、県産材安定供給体制の構築をテーマに、川上から川下までの連携による一体的な木材生産販売体制の構築を目指し、県産材の需要拡大をすすめているところです。

【商 業】

江戸時代には門前町であった奈良町、郡山藩の城下町として栄えた郡山が、最盛期にはそれぞれ2万人以上の人口をもつ二大商業中心地でした。高田、御所なども農村加工品の流通の中心地として発展してきました。しかし、このころから奈良県は大阪の経済圏に包含され、本県全体を掌握する中心地はできず、時代が明治に至ってもこの状態は変わりませんでした。

明治25年の関西線の開通、大正3年の大軌電車（現在の近畿日本鉄道）上本町～奈良間の開通をはじめとする鉄道網の整備は観光客を増やし、新たな商店街の形成をみるどころもありました。

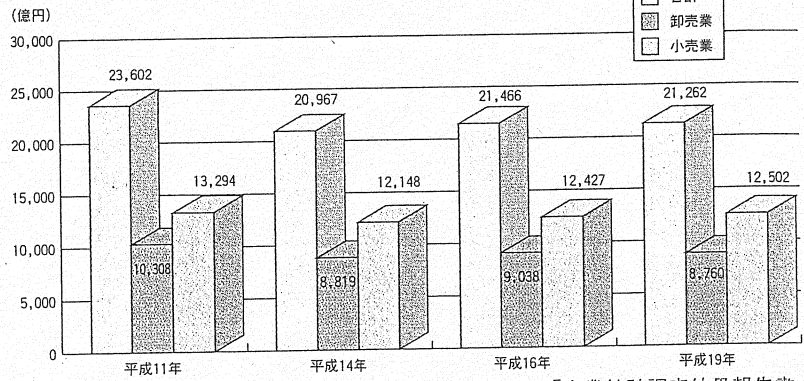
しかし、当時の商業は主に農家を相手の小規模なものが多く、大正時代には米価の下落の影響で打撃を受けるものもありました。昭和5年の国勢調査によると、商業従業者（当時の職業分類）のうち、家族の補助も受けず自分一人で営業しているものが32%も占めていました。

昭和9年には県内4銀行が統合して南都銀行が生まれ、28年には三栄相互銀行（後の奈良銀行、現りそな銀行）が奈良市に設立され、本県に支店を持つ県外の銀行とともに奈良県の商業の発展に貢献しています。

昭和40年代以降、大阪等からの人口の流入が著しく、こうした傾向は購買力を高め、商品販売額の増加に結びつきました。また、平成19年の商業統計によれば、本県小売業の年間商品販売額は1兆2,426億円で、前回調査とほぼ横ばいの結果となっています。

今日の中小商業を取り巻く環境は、モータリゼーションの進展による立地環境の変化、後継者不足、リーダー不足などにより、非常に厳しいものとなっています。奈良県は、商店街の活性化に向けて意欲ある商店街に対して、市町村・商工会議所・商工会と連携し、まちづくりの観点から商店街活性化に努めています。

年間商品販売額の推移



資料：県統計課「商業統計調査結果報告書」

【工業】

奈良県の工業の中には墨・筆・和紙・薬・漆器・素麺・清酒・茶釜・割箸・赤膚焼など、江戸時代、あるいは古代、中世にまでさかのぼる長い伝統をもつものが多くあります。

江戸時代には、奈良晒や綿織物に代表される都市手工業や農村工業が発達していました。明治7年(1874)には、奈良県は全国の中で、農具が4位、綿糸が5位、綿織物が7位、菜種油9位の生産をあげ全国でも先進的な地域に属していました。そのため資金が豊富で明治16年(1883)には早くも近代的紡績工場が設立されましたが、この工場は石炭の入手や、営業面でおもわしくいかず廃業となりました。

明治26年(1893)、同29年(1896)に新たな近代的紡績工場がそれぞれ設立、同27年に電気・同44年にガスの供給がはじまるなどめざましく近代化していきました。しかし、奈良の位置が東西幹線からはずれていたこともあり、工業生産額が農業生産額を上回るのは大正8年(1919)にもちこされました。

昭和のはじめには、紡績業の生産は安定し木綿や緋から変わったメリヤス、貝ボタン、靴下、皮革などの地場産業の形成も進みましたが、戦争のために挫折するものが多くありました。

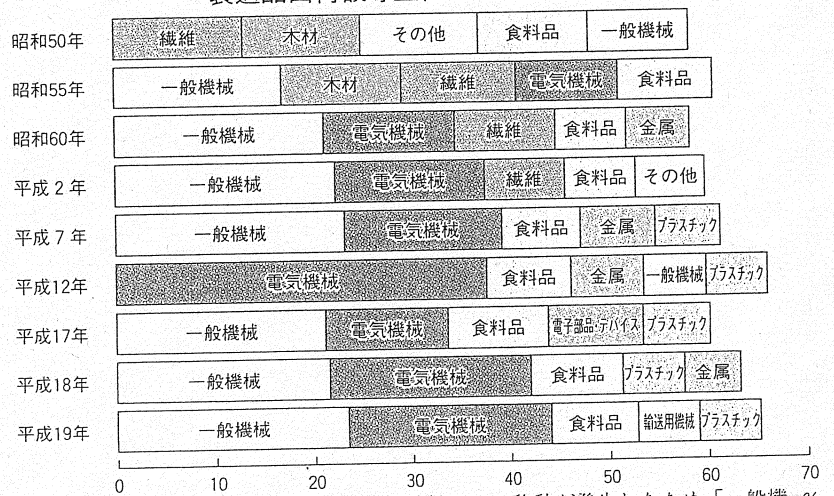
戦後、奈良県も復興の途につきましたが、本県の工業は農村に基盤をおく零細規模の軽工業が多く、昭和30年代の高度成長期にも繊維、木材、食品等の業種が大きなウエイトを占めていました。本県は内陸に位置し港湾を持たないので、重化学工業には工場立地の上で制約が大きかったためです。このため、昭和30年代末から県では工業団地の開発に取り組み、内陸型工業の誘致・育成に努めるとともに県内工業の活性化をめざし中小企業団地の開発を支援してきました。

昭和40年代に入って、昭和工業団地等が本格的に操業を開始すると、一般機械、電気機械等の製造品出荷額等は飛躍的に増加し、その占める割合は昭和40年代初めまで、20%以下だったのが、昭和60年には30%を超えました。平成の初期には、

県や民間デベロッパーによる工業団地の完成が相次ぎ、県外からの企業立地が進みました。

奈良県の地場産業としては、靴下・ニットなどの繊維、木材、機械金属をはじめ、プラスチック成形、毛皮革製品、サンダル、スポーツ用品などがありますが、近年では、創業や経営革新、新規成長産業への支援体制、産研学連携による研究支援体制等を整備し、県内の起業化シーズの発掘、育成に取り組むとともに、県外からの企業立地を促進することなどにより産業の活性化が図られています。

製造品出荷額等上位5業種の変遷



(注) 統計処理上「一般機械」から「電気機械」への移動が発生したため「一般機械」の金額が12年は大幅に減少しました。14年より「電気機械器具製造業」は「電気機械器具製造業」、「情報通信機械器具製造業」、「電子部品・デバイス製造業」へ3分割されました。資料：県統計課「奈良県工業統計調査結果報告書」

文化・観光

豊かな自然と世界に誇る数多くの文化遺産を有している奈良県は、古代から政治の中心として、大陸からの文化を積極的に取り入れてきました。特に古墳時代、飛鳥時代、奈良時代には遣隋使・遣唐使等の国際交流を通じて日本文化の基礎を築きあげ、さらに中世には、社寺・町屋を中心に能・狂言の発祥地として、日本文化の発展に貢献してきました。

また、近世から明治・大正・昭和にかけて多くの時代を代表する人物が、奈良の豊かな自然とそこに住む人々が育んできた伝統文化を賛美してきました。奈良は、「日本人の心のふるさと」であり、世界に誇り得る日本文化の中心となっています。

本県では、こうした先人が育み培ってきた貴重な文化遺産や歴史的風土の保存を図るとともに、県民参加による新たな文化芸術の創造と発信に努めているところです。

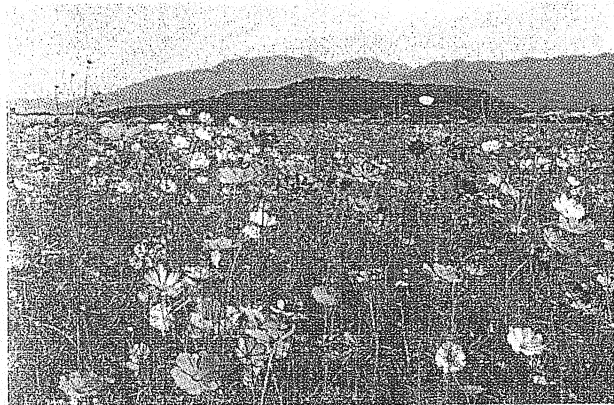
本県の観光には、奈良盆地を中心とした史跡・古社寺などの文化財などをめぐる観光と、山岳地域の自然に親しむ観光の二つの面があります。

まず、「法隆寺地域の仏教建造物」と「古都奈良の文化財」の、二つの世界遺産に代表される古社寺には、飛鳥・天平などの各時代を代表する仏像や建築物が数多くあり、そのほかにも、飛鳥・藤原・平城の宮跡などの史跡も多く、歴史の舞台を訪れる人々は後をたちません。

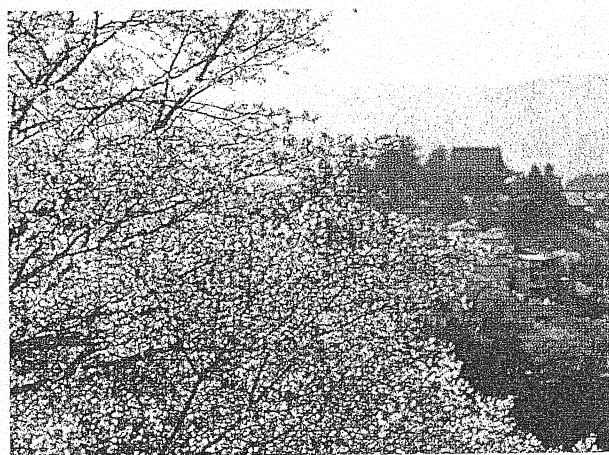
また、南部には千年以上の歴史をもつ吉野山の桜や登山・ハイキング客でにぎわう大台ヶ原・大峰山系などの雄大な自然、十津川温泉や洞川温泉などに代表される数多くの温泉があり、このうち吉野・大峯の霊場と大峯奥駈道・熊野参詣道小辺路などからなる「紀伊山地の霊場と参詣道」も、「道」としては日本で初めて世界遺産に登録されました。

さらに、明日香村、橿原市、桜井市の一部が「飛鳥・藤原の宮都（きゅうと）とその関連資産群」として世界遺産暫定一覧表に追加記載され、奈良県の4つ目の世界遺産登録に向けた取り組みを進めています。

このような豊富な文化遺産や自然を求めて、本県には毎年多くの観光客が訪れていますが、エコツーリズムといった自然環境や歴史文化を体験し学ぶという観光のあり方が注目を集めている中で、奈良県はますますその価値を高めつつあります。



藤原京のコスモス



吉野山の桜